

JOMF 派遣医師便り (2017. 1)

◆マニラ◆

トンドで過ごしたクリスマスイブ、2016年12月24日

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

2016年12月24日、妻とトンド地区に行きました。マカティ方向からイントラムロスを超え、更にパッシング川を超えると町の様相が一変します。マカティ、アヤラ、ロハス通りでは道沿いに光のクリスマスデコレーションやビルに大きく飾り付けられライトアップされた人形が華やかに立ち並んでいます。そこにはクリスマスの飾りつけがほとんどありません。道は狭く自動車の交通よりもトライシクルが縦横無尽に列をなして走っています。ようやく20cmくらいのサンタクロースの紙飾りが家の軒先にかけてあるを見つけました。その街で、優しい人々との出会い、澄み切った子どもたちの瞳に触れることができました。その1日をお話します。

ごみの最終集積所が集まっている地区の入口にたどり着きました。去年は路地の入口でハムや野菜を売っているサリサリストアがありました。今年はそのお店が見当たりありません。人影も少なくクリスマスの様相は全く感じられません。中へ入っていくと全体が薄暗く電信柱から引いてきた何十本もの電線が大人の頭の高さまで大きくたわみだらんと垂れ下がっています。家々の窓や鉄格子の境界には洗濯板で手洗したと思われる洗濯物がびっしりと干されています。狭い道には洗濯水や排水が路地の中で水たまりを作っています。

さらに中に入っていくと上半身裸の小学生が数人寄ってきました。我々を興味深そうに見ています。「どこから来たの？」とみんなが聞いてきます。プラスチックカップに入ったお菓子をパクパク食べている子、まじめそうで恥ずかしげな子、話し始めたら止まらない子、極端に痩せている子など皆笑顔でにこにこしています。話しかけると子供たちはほとんど英語で返答してきますが、「ハポン？」と問いかけてきた少年がいました。ボスの存在の子が「His mother is a jyapayuki (ジャパユキ)」と、その少年を紹介しました。「その子の母親は日本で働いていたんだよ」という意図のようでしたが、このように小さな子供から「ジャパユキ」という言葉が出たのには驚かされました。

子供たちの健康に問題が無いか？と聞きましたが「僕たちはみんなとても健康だよ」と答えていました。昨年訪れた時、「この時期は下痢をしている子供が多く、食中毒を心配している、救急車で昨夜搬送された子供が3名いた、きれいな飲料水が欲しい」と話していましたが、今年はみな元気そうで安心しました。

子供たちと話をしていると40才くらいの住人の女性が笑顔で近付いて来て、「日本人です

か？」と日本語で問いかけてきました。日本語交じりの英語で「私タレント、日本に住んでた、千葉と埼玉に住んでた」と話してくれました。4カ月ごとに日本へ行き、2017年も日本へ行く予定とのことでした。

持参したケーキやお菓子をその女性と一緒に集まった子供たちにプレゼントしました。はじめは小学生の子供たち数人だけだった場所には乳児を抱えた母親、泥んこだらけで鼻水を垂らした2~3才の子供、元気の良いクリクリした瞳の小学生、そして大人まで大勢が列を作って順番に並びクリスマスプレゼントを受け取りました。先ほどのとても痩せてあばら骨がみえている子も並んでこちらを見つめています。薄い胸郭のからだを元気にみえるようにとあえてたくましそうなポーズをとっています。彼は突然何か言いたそうに、片手には手渡した数個のケーキを持ちながら「たくさん食べるよ」と食べるポーズをし、“大きくなるから、大きくなるから”と細い小さな体で私たちに何度も約束してくれています。「うん、うん、そうだね、たくさん食べて大きくなっていくんだね」と言うと、嬉しそうに笑顔を見せてうなずいていました。“彼は私たちに約束してくれたんだ”と思いました。

住んでいる方たちの衛生環境を尋ねると、その女性は更に細い路地を奥へ奥へと案内してくれました。木の椅子が3個並んだ小さな広場や20cm幅の排水路があります。排水路は雨水や下水が流れるようになっていますがゴミがかなり溜まっています。

一人の老人が“熊手のような引っ掻き棒”を持って排水路を掃除しています。たのもしなお爺さん、「この下水のゴミをね、わたしがいつも掻き出すのさ。なぜかというとな雨が降るたびに洪水になって水が溢れてみんなが大変なんだ、 Deng 熱だって広まってしまうよ」。「そうですね、みんなお爺さんのお陰で助かっているのですね」と答えると、「その通りさ」。下町のみんなのお爺さんの心は大きくて暖かい。

路地の突き当たりまで行くと少し広くなっていて、5m四方のバスケットボール練習場があり3人の青年が練習をしている。病み上がりの妻もいきなり仲間に入ってシュートをさせてもらうがなかなかボールがネットに入らない。“こうするんだよ”とやさしい青年がコーチしてくれる。彼らはボールがネットに入るまで何度も何度もトライさせてくれる。応援ありがとう。

更に路地の奥まで進んで行きます。1m幅の道を50m位歩いて行くと突き当たりには屠殺場がありました。彼らの家々とは隣り合わせになっています。入り口の監視員に「場内に入れますか」と聞きましたが、クリスマス休暇で残念ながら中には入れませんでした。

元の路地入口に戻る道すがら、小さな家から幼稚園くらいの子供たちが恥ずかしそうにそっと寄って来て、私の手の甲を取り自分の額に当てお祈りする仕草をし“メリークリスマス”と祈ってくれました。

子供たちの歌声が聞こえます。水溜まりをよけた路地沿いに古いカラオケ器械が置いてあります。マイクは？と当たり前のように尋ねると、キョロキョロと探していますが見あたりません。器械にはコードの穴だけが見えていて、それを指さし、少年たちは少し申し訳なさそうな顔をしました。“あっそうか、マイクなんて無くてもいいんだ、みんな画面を見ながら歌えるんだから”。子供たちは歌詞を見ながら妻と一緒に大きな声で力いっぱい歌い始めました。

私たちが忘れてしまった優しい人々との触れ合い、澄みきった子どもたちの瞳。ふっとタイ

ムスリップしたような錯覚を覚えました。

生きていくのはどこにいても本当に大変なことです。でも大きな可能性がこのトンドの街で確かに芽吹き、その呼吸している音が聴こえてきます。

2016年12月24日、トンドのクリスマスイブでした。